

サッカーの活動における暴力根絶に向けて

暴力根絶相談窓口にあった通報の中から事例をご紹介します。

保護者からの通報

14歳の息子は、幼児期からサッカーを始め、小学4年生からはクラブチームに移って自分の目標の中で努力してきました。サッカーは生きる“糧”でした。中学校は部活動のサッカー部へ入り、日々頑張っていました。サッカー部では、強い上下関係の中で怒鳴られて動く、注意が入り動くような状況の中で活動を行っていました。息子は、恐怖で萎縮しながら接する場面が多くありま

指導者の発する言葉や態度は、受け取る側の選手にとっては、「指導」として捉えられず、「威圧」や「威嚇」に捉えられる場合があることを、私たちはしっかりと認識して選手と接する必要があります。指導者の発する言葉の影響は絶大です。この事例の背景にある状況は不明ですが、サッカーが

した。また、多くの試合にも参加したり、トレセンにも並行して通ったりと休みもなく、体力的にも、精神的にも疲れ切っていました。

そんな状態でありながらも、実績のある指導者と聞いていましたので、息子が部活動の指導について悩み、相談してくれたときも、「指導者に相談するように」と伝えたりもしました。そうした中、息子は強い言葉で何度か叱責を受けたことが契機となり、不眠、腹痛、頭痛を発症するようになり、突発的に家を出ることも何度かありまし

生きる“糧”であった若者が、サッカーができない状況に追い込まれた事実は確かなようです。

サッカーを好きになってもらいたい、サッカーを続けてもらいたいという思いはどの指導者も共通するところですが、その思いが適切に選手に伝わっているか、選手たちにポジティブに受け止めら

た。医者からの協力をいただかないといけない状況に陥り、薬やカウンセリングも並行して受けるようになりました。

医者からは「長期の治療が必要」と言われています。息子がこのような状態になり、親としては各指導者の方々には今一度真剣に指導方法について考えていただき、今後このようなことが2度と起きないようにお願いしたいと思えます。

れているか、ポジティブに受け止められていない場合はしっかりとフォローできているかどうか、日々の指導の振り返りが大切ではないかと、この事例から考えさせられます。

保護者からの通報

……高い技術を有する子どもたちが通うスクールだと思います。しかし残念なことに、コーチは、自分の思った通りのプレーができない子に対し

第三者からの通報

……(辞めた理由を該当選手の保護者に聞いたところ)暴力・暴言がひどく、サッカー以外のこと、例えば、用事が少し遅かったといったこともその対象になります。このような環境に子どもを

「……皆うまくなりたいと思うから耐えるんだ!……」

指導者と選手という絶対的な関係性の中で、なかなか声を上げることができず、耐えながらサッカーをしている子どもたちは、サッカーは楽しいスポーツだと感じてくれているのでしょうか?うまくなるためには、暴力・暴言に耐える必要があるのでしょうか?

「……環境が変わることで、言われてきたことが間違いであった……」

何らかの形で指導環境を改善すること、選手に手を差し伸べることはできなかったのでしょうか?

ていららするのか、指導の域を超えた、いじめにも相当するような暴言・暴力を加えていました。体罰が社会問題として大きく取り上げられるようになってからは、精神的に子どもたちを追い詰めるようになりました。他のクラブに通うように

預けて良いのか、と悩んだそうです。辞めさせたいけれど、指導者が怖くてなかなか辞めると言い出せない。しかし、「子どもの精神状態がおかしくなってしまう前にどうにかしなければ」と、ご両親は指導者に話をしたそうです。辞める理由は「暴力のせいだ」とは言えず、「家の都合」と言って

苦情を言うこと、問題提起すること、そうすることによる報復の恐れがあったり、サッカー環境を失うことであったり、仲間を失うことへの恐れなども、暴力・暴言に耐えさせている一因かもしれません。

「……辞めさせたいけれど指導者が怖くてなかなか辞めると言い出せない……」

何が怖いと感じさせてしまっているのでしょうか?指導者は、保護者とも円滑にコミュニケーションをとることで子どもの様子を知り、サッカーを本当に楽しんでもらっているかどうかを把握することも大切だと感じます。

いかなる理由であれ、暴力・暴言は許される行

なって「皆うまくなりたいと思うから耐えるんだ!」と言われ、信じていたことが大きな間違いであったと思ひ知りました。

辞めたそうです。本人は「理由もなく、指導者の機嫌次第でたたかれるから嫌だ。指導者の顔色を毎回伺わなければならない。サッカーが好きなのに嫌いになっていきそうだった。怖い」と言っています。

為ではありません。子どもたちに「サッカーは楽しいスポーツだ」と感じてもらい、もっとうまくなりたい、上達したいという気持ちが、子どもたち自身の中から湧き出るような働き掛けが大切だと考えます。

JFAは、サッカー界における暴力根絶に向け、「しない、させない、許さない」をキーワードに取り組んでいます。指導者ばかりではなく、選手や役員、保護者をはじめ、関わるあらゆる人たちが、この問題に対して意識を高め、雰囲気や文化を変化させていく必要があります。その意味でも、前号で紹介した「ウェルフェアオフィサー」の配置など、さまざまな方面から多角的に取り組み、より広く働き掛けていきたいと考えています。